



京
奇
藝
集
聖
話
一

古今奇談後編

古今奇談後編

浪華書林

稱觥堂

楊芳堂

近頃行者三十年あ。國字小説數十種を
劇作て原語みだ。千里寄手と申す號で。
美玉紙九種を擧て書林に擧げ。左は。せ
まよ早うりぬ。其ごろかくり者めが花も
あらず。市小隱き。山下橋みトを賣り。宣城
鬻き。高湯はあふやあし。去東吉浪
浪年可遇る。書林予に縁てモ錦稿を
取し。りそ然一叶津み其事すあり。今も
がき残玉のぼと。湖にて遊家は寄る。笠の
中より。冊子をどうぞ。鯉魚と拂ひ曉て
と一て。モ様基を忍む。同族を私て。鯉魚も
而何り。そのそ寧づるづめ。事も而う
一念生れ。其首ある。事のたちゆる。徳は。是
をこそ一方未至の賦也。号を更代。守屋
乃連。お言の事に意ぬ。くく。死の理も
よく度たり。本來うの故半可。但代の
侍を整て。御色付人を廻すと。と
置く。白葉乃巻ハ。ふ様柄巻の嘉題を
備り。占トの前物ふ。固ふ。アと從ふ。女教
の名實室せんと。とたす。唐の

爾^ハは叢^ト散^スの心^ト喜^スを殺^シし。聖^ト明^ト代^ス傳^ス言^ハ
に龍^ト雷^トも表^トも^ト神^ト断^スる。仁^トの始^ト
跡^ト杜^ト十^ト始^トと號^ス。傳^スノ傷^ト性^トをか
たり。子弟^トの戒^ト行^トを有^ス。宇佐^ト美^ト乃^ト
津宮^トの戰^ト器^トの軍^ト械^トの^ト是^ト失^ス頭^ト。而^ト
其^トの施^ト者^ト如^ト许^ス。彼^ト九^ト極^ト。傷^ト又^ト
長^ト休^ト方^トりと^トて。早^ト後^ト是^ト復^ス名^ト山^ト川^ト。古^ト
老^トの竹^ト吹^ス。土人^ト乃^ト碎^ス。此^ト本^ト也^ト。世^トは^ト之^ト
傳^ス。而^ト是^ト演^ス義^トして。長^トき日^トの無^ト事^ト
傳^ス。而^ト是^ト演^ス義^トして。長^トき日^トの無^ト事^ト

○英^ト艸^ト後^ト編^ト序^ト

口二

ぞとばま^ト鳥^トを^ト脅^スりと^ト。彼^トうづる^ト晴^ト
月^ト射^スたりよ^ト是^トの心^トも。尋^ス海^トの桂葉^ト三^ト片^ト
玉^トすすむ^ト身^ト聖^ト徒^ト五^ト社^トと^トす。化^ス老^ト此^ト
自^ト厭^スり^ト。是^トも^トかず内^ト離^ス又^ト先^トづ^ス自^トの^トな
らん^ト。し^ト僕^ト千里^ト信^ス手^ト可^ス於^ト新^トの^トな^トあ
き^スば^ト其^トひ^トく^スバ^ト接^スや^ス。可^スと^ト一^ト
往^スを^ト變^スする^ト。已^ト愈^スか^スざる^トの^ト業^トあらう^ト。

四^ト和^ト乙^ト酉^トの^トキ^ト十^ト干^ト丙^ト人^ト機^ト

吉^ト民^ト逸^ト

古今奇談 繁野 話題目録

近路 行者 著

子 里 行 子 正

第一篇

雲魂重情を告て太平紙聲上活

第二篇

守屋長政生紙草莽上引活

第三篇

紀の園守が靈う一廻白多よにむる活

第四篇

中津川入道山伏塚を築しむる活

第五篇

白葉の方猿掛の岸よ怪骨を射しむる活

第六篇

素卿宦人二便と唐船を携る語

第七篇

麗月ニシテ兼倉龍窟ニ詫び往々

第八篇

江口の遊女薄情成恨て殊玉を沈む語

第九篇

宇佐美ニ津守遊船と歸て故と平む語

○英艸席後編目録

以上九篇

古今奇詫繁野話第一卷

○雲龜を怪を語て久きを誓ふ話

雲を體とし水を心とす。平生清いはくに極ての心。世塵より離れて、聚門の身す。只恐やくとあはれに御所の法蹟飛鉢の遺地。おもひて精進の助となさんとぞひらめく。年少経ちぬる年年の往來をよみうるめり。又水の初の春とてや度と共に生て秋風とゆる期く。また路とあらうるを眺望して富士の麓と過ぎたが。おろし口へ登際の志すふり。本境からさへ何事もらひやうてか西くもかう。往くる路の曉靄へ室と云の宿のと同ふ新しく夕の深て胡多の雲よれ波を生む。夕かく雲のあたたかく。おはうけと此寺の傍依よか音ありて數日の勞を休め。一夜此寺のほ層の五層よせも。併様の上人生をかへ學びたりたゆまゆゑも人の除ひだき

○英艸席後編卷之一

あの棲窟をあ。隱ぐきみの様とこと。秋涼の色秋讀頌あけよひをかくもぐれべ世とをぐらむる心地し。云階近きとくの心をけやくむひる。上緒の月夜とふる夕花と雨季うりて起々と脇なり。秋同かそこなうこかくとくとふる月のとむんあづの宮とくだうなうだ。又無体拂ひ眼を償ひ。塔の頂と物れくとて路とや你達陽のとみとからそとう。四方に位してかしこよ遠くをむかひと。南うへ直小よひの雲路稀にかうの云路へまかて縦ぞうかう。わざとみの海をよほて。荀よかまば海水よ消され御まつす。かくと太旋た旋の風よ吹かず。さしひ雲水の圓あらんようて衆雲と共す。一月ごとすもよれ停ととめう。世の中よ雲かくとくありとも是がじよ處雲材とふかくよろ。ぐるのこざかよ。然と丹波をかとゆへ。少主立寄候中ともひまみてえゆがゆへ。看て松塗の櫻

臺を廻りて賣化定たり。坐し乾達馬^{タケダ}よりにて。屢々^{たびたび}は濕せ
而も底の心ひ若齋^{わざわい}やう。だ。高き風ふとがまき東西より
くそいんやんえもえのそくにふれ。氣をすまう村雲。秋冬より
極^{きわ}に雪。春^{はる}はゆる山煙など。近き風より吹まよされ
て。ふう西。南よりふへらう。我同姓^{よなご}に。然うそくへ遙
遠く吹風^{ふぶき}。人間^{ひと}のいだそなへを。奈良次郎^{ならじろう}と。つば。まよひ。秋
空^{あそ}を涼^{すず}の體^{からだ}をゆくと。やどり。腰^{こし}をぬかす。脚^{あし}を及^{およ}
ざる。但^{ただし}。ひ立てまねのねと。秋雲のとどかう。やひまと
ゆかう。左小海風^{こみづか}。障^{さざな}ら紙^はと立て梯^{はし}。奇峰^{きほう}のたゞゆひ。掲^{あわ}出
たり。世の人泉の小^こなうが妻^めを。奈良城^{ならじ}。集^{あつ}まつくり。皆^{みな}信
の身^み。引たぐべて。かくもゆあるう。二方^{ふたがた}へ向^{むか}。白峰^{しらみね}。姓^{うぶ}がむも

○英艸席後編卷之一

二

遂^{つい}に別て。ひる附^{つき}りて。か。板^{いた}をひと魔^ま耶^や。ひとあけり。ひとあ
のひは。おとあと。元^もよう。素^す姓^{うぶ}名^な別^べ。そ。強^{いさ}ハ六甲^{ろくこう}の左右^{さゆ}ま
ひの首^{くび}へ。左^さ。魔^ま耶^や。多^たく部^べの山^{さん}。よし。う。東西^{とうざい}を。參^{さん}室^{しつ}。よ
候^ま。汝^なれの。人目^{ひとめ}。は。もと。がく。よ。ゆ。黒^{くろ}きと。アの。ゆう。だ。
返^か禪^{ぜん}。よ。薰^{かぶ}。よ。と。雲^{くも}の。色^{いろ}。よ。金^{かな}。よ。衣^{きぬ}。よ。秋^{あき}の。よ。づま。よ。び。ぬ
越^こを。設^た。時^{とき}。と。法^{ほう}。人^{ひと}。ひ。と。ア。と。を。我^{われ}。よ。あ。く。よ。か。う。四^よ
と。小^こ紫^し。我^{われ}。よ。人^{ひと}。を。繕^{つく}。と。あ。ん。ば。我^{われ}。六^{ろく}甲^{こう}の。高^{たか}き。き。情^{じやう}。と。車^{くるま}く。ち
ちにて。彼^{かれ}を。布^{ぬの}海^{うみ}。坐^す。我^{われ}。よ。接^{つゝ}。と。どう。在^ゐ。間^ま三^{さん}郎^{ろう}。と。あ^は
に。よ。し。重^{じゅう}か^かれ。とも。兩^{りょう}師^しの。小^こ將^{しょう}。か。う。よ。追^{おい}。逃^と。避^さ。と。是^{これ}れ
ども。我^{われ}軍^{ぐん}の。怪^{あや}。ひ。づく。と。因^{いん}。く。と。四^よ。う。く。人^{ひと}世^よの。お^おう。わ^かく。ん。や^う
わ^か。且^まハ。雲^{くも}水^{みず}の。よ。底^{そこ}。か。ぐ。さ。う。の。く。も。が。ま。く。が。ま。と。伏^{ふく}。一^{いつ}言^{こと}
も。よ。が。く。と。せ。あ。そ。ん。ま。と。と。よ。し。言^{こと}も。う。べ。ま。も。と。あ。く。し。の。ひ。我^{われ}軍^{ぐん}

なり。徳堯禹より厚いとたる人の譽められを。らひあひ付くは差
かきけのちがれをやん。天の戸あまを朝す霞は。里をすそく秋月の山の
所をやるなり。づこはきてう春と秋と山を旅し。ゆく宿にて岫
をもよねり。曉のしづか山かづとみづかへて是處は。すと
くわく人の日とも好景や。西かの山嶺と衣きせては單とひだり
人の足は僅し。东かれ隈と深く取とば雨と疑ふ。あるく六甲と越
えだ日和とよろしく。海上と陰ては漁村を害を。或日は少く東に至
りづつて遠方の氣と無し。攝の空と陰晴。夏の日小舟の雲展ざんば
さつみあらひふよ擾て急雨を行ふ。凝のとほする林のあらひととくじがりて
衆せみのひとあらども。黒雲附上よ勝くしてはむねの楫を回す。じゆやぬ
のくよ二日霞。一び厭りと口惜ひとぞ。林のすみゆのほき林へ
こらす。風のすみく月のかれ。月をみてかすとア。雨とさむすくて霞



モテカゲリ附へ極悪人きわひのひとノ如ごとく入いり。詩客しぎゃくの宿題しゆだい歌人かぎんの擬作ぎさく空うつく腹はら
中なかに朽くし。晦くろをなう。ぞして月つきと夜よの字じを漏もす。もひを罪つみふく是そこ也
と。風かぜ驅よとて往来りわう。情縫じゆうにはうそする身みの我わと幽うつぐれど。喜うきらうき
早はや風かぜの活潑わくぱく烟瘴えんとういとぐらんと。人ひともんとも。行ゆくまうらも月つきのむりやす
かまうらさんた。雲くもの集ひつるまをす鵠けりとつ。月つきの色いろ小赤こあかきこまをこ歎うなと
少すくなる。混まざり混まざり分別わけり。又また我わを姓うぶへた。黃おう氏うじの一族しやく。月つきこそ兄お
妹めい地ぢとこそ人ひと。我わを名なふ。無むからば。世よの諸よ人の太お空うつの一属いっしゆのやうよう。不ふ可か
ももど。其その系圖けいとえよ遠とおひて。太お空うつ氏うじの其その德とくを考かべてえうれ。若天皇わかみわ天あめ
皇こう天あめ上うえ天あめと四季しきの名ながりとどもみどりの色いろかまうば。其その故ゆゑ深ふかくして浪なげ
里さとをえぞだ。我わらへ原はら地ぢより八は千せんと量うらりて。而が實じつがだせせかねばく
而が取とれる。人ひとも。風かぜの形かたちにも吹ふ行ゆくて吹ふく。我わへ一日いちの閒ひま消き
息ききす。一いつ向むか日ひのたてぬきに照ひて。日ひを暖あたとやうんうん附つい。黨だん

る深の山を渴て春若界とねぶ。ほんの亥を駆りけり。その日れ
をとみ。夏の日へ暑氣はかんじぬ。露もひくとも秋もあらひぬ
わば。我造めの世の助ともなうへ雨而已なり。是も其土地雨季と云
どり。時とぞざれを絶てあらず。或は他方の氣のあふる雲をとそば
方の天を休供ト。人の雲情休敷遣てと多し。時ありて水とあふる
海潮水の分らぬけども。雄氣を去ての残雲中の松声なり。龍
み澄て起る真龍即ち風雲の教属り。ばり。雲かくにみうゑと
奇水と名す。多く是遠方の龍雨なり。又春の靄氣乃空を満さ
ふ。が夏と向て溶け降る。毛は傍り見てこそ。此雲とかりて。がる雲
鬱鬱しきといへせん。ややうるの内に紫のぐる。緑のぐる。もの距のせ
あらうるあり。只座下の人へ足まへ。雲とぞ。遠き空を横ぎり
て行ふ。一隊く其脚をあらひ。散は風みだへども。現れ波入聚散

○英艸席後編卷之一

五

ふとハ陰陽の布小はす。風の力を界とす。のひハ吹のこゝりとそく
一定の練と。又織娘のとそ廣く水はその文と。かすへ。風の中とそ
ひ。ちとす。震をあらひ。雪はかんじてへ。ひのそが。然巣中とそく
し。左よ。族て絹の白。しくひく。ひく。とは天氣のたけり。わきこの雲かく
絹をきこの雲を指へ。風もそんとて甚あらひ。かく。よ。う。雲
東に紛下かる。雲西。ひく。へ。風上下に。ひく。聊。雨氣の。軽く。かく。空
うち吹が。風は其地勢と。うて吹もどり。あり。流れの。羽ひ。うそ
そ。風吹て出紙を送り。略。ふ。秦風。ふ紙を。へ。し。天経の大津。多。轡
妻の機。地かく。風の勢。四方の。ふ。紙。う。圓。が。へ。土地。ふ。通。て。異。う。り。
唐土の書。ふ。紙。多。一。と。そ。も。方角。と。四。時。小。合。せ。れ。ぞ。邦。ふ。用
ひ。す。ある。風を。黄雀風。と。そ。も。時。六。月。と。あ。れ。ば。つ。べ。う。さ
が。め。す。本。羽。空。の。絹。紙。多。れ。も。ふ。一。か。ば。若。う。花。の。風。と。あ。

とてへば風吹をみなし。水氣半とも候る。又みその風ともいふ。
小國風とて吹あとの横ぎりも遠くまつて。直風を西
南の山にと向す。海も吹む。従ひ一字の吹送る。其をがほと
喰し。風雲の絃へ四方よりて走り。従ひは風の張りと
は端から。四方より吹風也。颶風と名づけ。吹くに、雲のぬきがる
うなづす。空や雲、雨、風煙へ酒もゑてねど。聞くに、もじらす。風
勢をゑぐんと。緒小白粉を落して。口そく吹くまに形とされ
を吹雲と名づけ。細々とそんと。欲やば羅章の傳と云ふ。會もあ
西の雲れ登蹄とあると。ハ雲氣弱よう人世へ伏へる。我りがく
はちよと人をかこらす。今あそす事未の雲氣をはと
かからず。百々セの後つるを平長。時休ゆ。祥雲深
氣底みたる引立て。福利海上満ち人丈林をう。限るき東風急
も安聴ふえりん。兔も角もとぞり。

○英艸席後編卷之一

六

あく。我らがくに浮雲を端袖をひりぐべ。第ニ四方に立そひて
一ぞ寄雲休也。難から世の觀。とくに厥時。とてとくとみよと。萬
のちに御て。四方ふもと云まど。沙門をもてて。とてとくと。萬の主
は我を抱ひゆびて。此妙なり。般若の莊嚴ひりぐべ。殊くも。雲
魂の詮を圓て。人もかく。同て。げ漢の四方。遊ふ雲の。昔より。各具名
あり。と初て。かくと。だもあと。夏ふ白雲と。おび。空なる妄言。聴く
も安聴ふえりん。兔も角もとぞり。

(二) 守屋の医瘡生を草莽に引説

敏達天皇の御代疫疾大に流絆し。蒼生を害する。かのびじ。時
お部の守屋の代。久連の職にて。練絆と言。職も。とて滅石。固く
言を述びて曰。凡善教の世界。絆めや。い國の善政。ハ其國。往々。彼の
居敷は國より。貿易を交渉も。立ふれ用ひて。取次。とてども。

地を易てへり。べき事あり。行とぞる風ある我國上古より。宮廷樂
樂ある。新羅百濟王化より歸附て。漢土の禮樂書に傳へ。人傳
りて。竟舜行ひ孔子述ふの。其備を明り。然れども。禮樂へ世代み
ち。寔ぜざることをねど。文武周公復せども。時宜へ變へだ。後々秦國
風土習俗の。是れを無視ひ用がて。近年併國の。教傳來て。教信するも
多し。其國遙隔。而西夷。ある。べき其土風の。若處を。も。先朝より
ありて。中臣の。鎌。愚文。尾輿等。疫疾の事より。而て奏して。下
奉胡え。百八十社稷の。神。ありて。祭。あれ。て。大下平。ノ。而。之
を。う。て。夷神。を。用。ひ。之。被。供。へ。夷狄の。は。施。を。ね。そ。世。は。驗。は。其
等。實。や。ば。寂滅。を。ほ。と。あ。て。生滅。を。経。ぐ。漢土の。上古。ハ。君。た。皆。是。壽。よ
と。百。歲。よ。ア。ズ。併。は。其。地。よ。入。て。年代。を。も。保。る。漢土。ハ。併。入。ざ。る。の。事。ハ。漢
書雅頌の音。ありて。万民。自ら。多。福。か。う。或。日。東。ハ。儒教。事。ざ。る。秦



人の量浅く毒りぬと長ろい。今夷國の神を信す本國の神と
しドモ少く國神多うて疫疾ヒ咎ヒ々と。朝廷之上に洋教言
財の弊を極ふの激論ナリとゞども。今日其言依用ひ件を立うづけ國
津神ニ謝ム。方民安きにシテ宸襟樂一ソノベトモヤル。余
時上馬子又長。又豊日王の長子厩戸王。幼年ナルモ聰明
人ニ秀ム。そんて守屋ニ對て云。大連の言而ん然用どとゞだ
即ち。志不休也。佛は夷狄の法用べべしと云ひとひも。深く考へ
に似る。我邦上古西より遷て來。神武皇西鄙ナリ起て宇内を開。そ
漢土舜王ナリ。諸馳ニ生れ東夷の人。文王ハ岐周。西夷の人をも
ども。皆は伏世ノ後世ニ至り。佛ハ津飯國王也。其國漢土ハ據。之
漢土と我邦ノ小なり。北南ナリ。世界の中中國也。又ニ新羅ハ分
別え。之は。又ニ唐番もかのとお用ひらうとあり。佛教モカノ用て万

民を仰りまへべきもなり。又佛は貧乏たりも。かく貧乏を説く
の其如ふ達せざる所へ其を教へてこそあらば。併へ其富貴を捨て
て其身をもれん。患難飢寒を免ましむるもあらず。ほの因ふやうと
空妄不実の事ば説く。世の凡夫不眞の心をうせば。年月を経て
て衆人要て是を棄て識の賢者其妄を知りんや。其妄棄てば。故
何ぞ漢土我國の今日云々。天神鬼神が傳うへて。妄な
まことの妄の妄を棄て。とてよりへ不善の論うて愚者の心
ふる。其人をもぞ虚妄れ體をもとし。世の人耽溺する体悟の意ある
太極にゆえん。とてよし。其憎愛とて取捨せば。後世必に至る相繼
折して勢二つを立どもろひ。儒家の儒生を重んじ。儒生ハ
傍家とおへく。或儒家を品せば儒生を譽ば。儒生史と記され
傍人を列び互に溫柔の和を失ひ。又佛教へて命ねを促す。と
併へ

○英艸巻後編卷之一

九

忌憚の説。と。己小書の海逸よ言ひ。勝より廢後亦を壽き。こ
と有ること。三十本がへ七年。或五六と。不文あり。彼の漢土
軍と佛の名と聞さるのゆゑて。後り。併徳の中より壽きもの
ある。漢土の佛語入せて後へ言語集解ゆく頃誦廢後。と
もあり。其國に通じる所へ音接と語難ふ。と。自説みて。争
ざる。不から。併語入せて。方民福か。と。と。ひ。後の利を。さ
ふ。又解す。早く聞ふ花の早く謝し。榮をたとへ。うづめ。又表と。る
し。み。財縁多にして。血脉續ぬられ。眷属よ富て。養ふ。と。是す。ねあり。
煙を少つ。多きは身ふくと。あらわるの後なり。世人是て
をあらざれば。貧乏なり。と。本生。也。佛學。かく。どんべ利益。ふ
あく。どと。どう。王者の民へ。森の處。そと。て。惠のうらひ。生活を
佛の利。も。不其城。又近ひ。しん。大連熱再思。と。少し。今漢土。聖

教説ありとべども。二幕のはべにて親切なうする成情ひ。丸も
直し漢土へ使を遣し。面接口付して秋園と利せんとすとて。左
や候ど。大連の高明ちうべりとうべり。大連ウレモ温色かく從
容て。右て聰明の論トモアホ世の惑を用。解る小市所際。あ
そ詳よ論どりに及ば。ほゞ愚陋の只。廣す。文華たゞりて。變
朴の風を失ひて。代り。王ふたたびく。萬元。明治。身
縁へ多言。及ば。帝元より。件をねす。守屋が一言と取と
くと。佛教を傳ひ。件儀と。流。修復を禁ぜら。されど。疫病よ
くさんから。件を流す。崇。と。多く人多うり。豊日正嗣て
立是用明帝。廄内皇子時をねて威名あり。守屋のたゞ。榆
勢稍移ら。用明崩れて。守屋は。侍第。宍穂部皇子を位え
と計。宍穂部皇子威勢を。おんて。懷。と。故。守屋を。殯宮祭え
○英州翁後編卷之一

一七

とて。七と八門。ゆき。けゆ。衆公属せだ。馬子遼。内命を。含て
宍穂と。害。諸皇子と。称。と。謀て。守屋。河内。の家を。圍。し。守屋眷
属家人と。卒て。緒城を築て。残。ひ。三廻敵軍を。却還。し。廄戸主。又。後
軍。と。办て。城を。力。守屋。軍事。と。利。一。族。後者。參。く。國。のみ。不。至。
其。ま。も。矢。す。被。勅。作。自在。と。ど。合。軍。と。告。そ。速。と。逃。と。之。と
脱。ふ。べ。れ。我。へ。と。今。と。そ。多。と。つ。矣。の。子。漆。船。の。巨。坂。張。て。守。屋。が
服。を。揚。て。見。と。代。ら。ん。と。も。ひ。京。小。坂。主。人。を。諫。て。服。れ。ひ。守。屋。熱
軍。と。同。と。く。皂。衣。と。服。を。換。駄。獮。た。の。使。ゆ。て。游。を。齋。毛。廣
激。の。匂。よ。う。と。是。より。か。の。ぎ。ま。く。の。れ。教。ふ。守。屋。主。役。只。武。人
已。城。來。地。よ。し。未。さ。う。か。い。そ。石。う。邑。の。長。よ。た。う。て。被。が。宅。の。邊
ふ。山。乃。岩。窟。小。ひ。と。み。く。れ。創。を。養。ひ。今。き。と。し。ら。そ。代。の。接

已經之後どもそんと命を保て。ひま山れ嶺みて人れ通ひあり
路もなく。秋のとせうござりるゆえ庵にむかひて高名を草業又
理じ世人足を効めなし。是ぞ限ゆれ張者自ら疾生氣と称し此
所より老矣を期と。つーくあはう推古帝よりうくて。蘇戸皇子嗣の
方ふくを政を移す。併は時爲めて興す。大利を建立。傍臣を
成就と。仕を唐よせ。隋唐の式より從て冠服を制し位陞を定め禮を
肇を樂を正し。國より疾疫なく五穀豐熟し。海内の治安未だより
小夜時より生そ世の勤作を以てゆき皆る。守屋坐て一すびに候至と
びへ在で云。蘇戸政を因て君安く民和樂や。不ふかのて他議は
你去て遠く教ゆる民間に立て。安て民人の澤を被る。併は
て國安き。窓戸そ我よ文せよと。少くは憔悴せり形よ弊垢づる
衣とほけ。乞食と大われぬよ経已に里遠くとへたよ飢ぢる



に寄奉に祀され片岡なり。すまやく。そよばくは興寺小
左て經營を下さる方へ従行して前とからんば不休にて衰と
足かひ。たゞ顧て彼ふ衣食供給べしと命じて從て寃人飢人の
傍より来てほてえ。飢人上の事と。施政の衣食供給の院と材の
事と命ぜり。今よりべつと。飢人強て起坐してえ。被者飢て自力
貿く能よ。まことに。まことに。おやうるの食供くらずしてけつとまよ。
余はびくとも。公目第一人の飢をこそ衣食供給。
天下の飢人いくぞあつと。いくぞと。衣食を極て供給べ
き。足近きに親しく遠き疎く。公はとくよよあらざる。寃人不與
之を言へど。とくよへらぬつありて其様を以て。本よ奇特のとれども
併用を下し。ふりて。飢人受け。其うす所爲先よどりの人の情の常く
況や執政一人の心の憲万人の心からを。裁よ近き飢人と惠ひ心

向とへ遠き國の國又其處なうんや。飢人地よりして災と伏を方
す宮とぬくせもひて。寛やけ飢人地なりふあうど。只を飢と
饑とまんと傷べーとある。能と

おとみてやうや片岡山に飯と飢て歎せらる其人哀をや成り
人としてこそやうやく。邑長とぞて衣食供給もとて飢人生れ
まことうがよく。寛人ちよの歩ゆをゆうて仁徳と稱と。飢人世に有
さき休と左人と對してやとやん

するぐる民の小川はたぐじと我大君のみそひとしと
使ゆて此より一聲とぞれとぞ異人からうと。まわそ人をうて飢人を
石をうす。使ひて附細る衣と其地とぞれと其人の糸もキ。どるそ
小坂は生れの顯とんと云成りと其不をのうむえ。境をとどく道
遙かなる歩みほれくなばむ四の野うるゆよ玄までたれ傷と飢

○英州備後編卷之一

十三

と仰す。後からあれ難仕する人あり。群じる漁人の舟をひそめて食
をやく。仰る漁人とぞと夜とあく人。你遂よ起さんべ。とだべの具を
ねさん。心安らむとぞとぞ。元乞丐も面々相附一語て云。前旨
榜政王片岡ゆて飢人を愈とよのと。諸有司もぐくと笑つと
て大饗の糧を減じて。今日よりから魚を沙汰せしと。内里組さ
よとひる。小坂是より遙々渤海とゆうも。船に附して右よのに東と
ある。和歌森と云。榜政王仁の國と云。一車を死骨よとす。民ふくも
絶とうけん。残怪び幸まんかるとれ。我今日國の令成もとと
其後の敵て世工の手を回づ。後鹿戸主豐せしとよて傷と廢
止と。年と経てハ里民と往来し。後と被て水代故ら土と算き利益
もととぞやうば。傍人里と出もりて体をしたゞも。山中老嫗よ
廻ざると。性と若ひ百歳の長寿と保ら。皇極の御とぞ鹿戸内

山背主へ鹿がみに亡き社其嗣を繼とすて致して云。此人の子も
して「しどひより」。教雲早く教ト安死りゆきかあらどや。小坂云
けは世の人足ぐる小言あり。左子須ド也墓地をみ。其立嘗の地脉
を断て收まし。右孫あせと至て廟せしむ。右頸なるよ。右義
聴て矣て云。葬地の右壳よりうて右孫れ盛衰を論する。櫛運行
弊風水家れ詫す。人を察そと其害大なり。故國其事の経る
とみてまこと。ひうれば墓を築くる身として。其墓を守らばきよ
孫の禍を免れしや。是左子仲を信ト世小功ありて其子孫續さうと。仁
は後かくと愚人の疑りして伏忍と。傍家ひ詫を妄作流言して。其
子と掩んとぞるあなさん。家運の大敵の定ふ。夏殷周の三代
も時あひて至るねペ鹿今勢とゆくも豈くさんやく。黒一
種なく馬ふ二代の繁華。入鹿とゆくて引遣あると云。翁世に實
○英艸席後編卷之一

易と云つて。時代遼小後きて。今い候ふ不キと云うて里人へもお
て云。我が先祖の大連ぬ都守臣の位。世絆のうけだよ。是代にて入る
べる。我を此地より祭うば。國よ水旱の憂なし。安寧ふ人びると。湖水の
そぞろぎくたるべしと。遠托ようて逝去後小祠を建て。又神の
神と祀まう。祭祀あるば。入連の一區くる巖窟也。今よ依然
遺在りとがうほへると云。

方正道人。既戸主。山守屋の長と親類ある。雪裡柿條順克柔
臨史何取口碑實。紅白就分秋與春。